

—縫製工場従業員の生理機能の変動について—

中村学園短大　。石橋葉子　原栄子

目的　前報では縫製工場従業員約110名を対象として、疲労感と自覚症状について、作業前・作業後の調査結果について報告した。本報では従業員9名について生理機能を測定し、合せて自覚症状についても調査したので報告する。

方法　Ⅰ）検査期日、検査地は前報と同じである。Ⅱ）被検者は9名の成人女子である。Ⅲ）測定項目はフリッカー値・数字判別検査値・調査項目は疲労感と自覚症状である。Ⅳ）測定調査時間は午前と午後の作業前後の計4回であるがフリッカー値だけは午前と午後の中間に測定回数を1回ずつふやし計6回測定した。

結果　フリッカー値は作業後低下した。低下の大きな測定時点は10時と15時であった。分散分析による検定の結果、被検者、経過時間の要因と被検者と曜日、経過時間と被検者の交互作用に0.5%の危険率で有意差が認められた。曜日別では1日目の土曜日と6日目の金曜に低下が大きかった。数字判別検査値は作業後低下した。分散分析による検定の結果、被検者・曜日・経過時間にそれぞれ1%の危険率で有意差が認められた。